文献情報：五十嵐祐 (2020). SNS にみる「ウチ」と「ソト」 学鐙, 117 (1), 10-13.
https://cir.nii.ac.jp/crid/1522543655920298112

SNS にみる「ウチ」と「ソト」

五十嵐　祐

現代が「高度情報化の時代」と言われて久しい。私たちの日常は、インターネットを基盤とする最新のテクノロジーに支えられており、生活の利便性やビジネスの効率は、それ以前の時代に比べて劇的に向上した。今やインターネットの存在しない世界を考えることは、ある意味、夢物語ですらある。原初的な小さな共同体でのつながりから出発した人間は、時を経て、今日ではインターネットを通じて世界をまたいだつながりを構築するようになった。一方で、知り合いとのちょっとしたメッセージのやり取りで生じてしまう誤解から、SNS での発言の炎上、さらにはフェイクニュースの拡散に至るまで、生身の体を直接介さないコミュニケーションがもたらす負の産物に、私たちが日々神経をすり減らしていることもまた事実である。

人間のこころに備わっている多くの能力は、厳しい環境の中で生存するために有利な特徴として、私たちの祖先が進化の過程で長い時間をかけて獲得してきたと考えられている。社会的な側面に限定してみても、他者のこころの存在を認識する能力、眼差しや表情から相手の感情を読み取る能力、相手や自分のこころの状態に応じて行動を調整する能力、さらには都合の悪いことを先延ばししたり、ものごとを楽観的に捉えたりする能力など、それらは多岐にわたる。地球上に人類が誕生してからおよそ 600 万年が経つが、その歴史のほとんどは狩猟採集を主とする時代である。ここで挙げたような能力は、もともとは狩猟採集という複雑で不確実性の高いタスクを、他者と共同で遂行する上で本質的に必要とされるものであった。

進化の時間軸でみると、インターネットの普及に伴う社会環境の変化はきわめて直近の出来事である。人間がこれまで慣れ親しんできた対面でのやり取りを離れ、映画「マトリックス」のような脱身体化された世界に馴染むには、おそらく相応の時間がかかるだろう。私たちは、狩猟採集社会で培われた能力をもとに、現代の複雑な社会を何とか生き抜いているのである。

脱身体化されたインターネットという社会環境と、身体化された存在である人間のこころのギャップは、時としてインターネット上での一見奇妙な振る舞いを生み出す。例えば、ツイッターでは「FF 外から失礼します」といった表現を用いて、ツイート（書き込み、つぶやき）に返信する人々が時折みられる。「FF 外」とは「自分がそのアカウントをフォローしている／そのアカウントからフォローされている、という関係にない」ということを指す。英語のフォロー（follow）は「追いかける」という意味であり、「つながる」という意味は含まれていない（芸能人とファン（追っかけ）との関係を思い浮かべるとわ

かりやすい)。あるアカウントのツイートを継続的に確認したいと思ったときは、フォローすることで常に最新のツイートが自分のアカウントに表示されるようになる。

その一方で、ツイッターは他者と相互にかかわり合うオープンな場を提供する、公共圏のひとつでもある。ツイートの内容はアカウントの非公開設定を行わない限り、フォローの有無にかかわらず誰でも検索が可能な状態となっている。また、リツイート機能によって、自分がフォローしている（追っかけている）アカウントからのツイートを、自分のフォロワー（追っかけ）に共有することもできる。この場合も、フォローしていないアカウントからの情報が間接的に入ってくることになる。

フォローはあくまでも情報収集の効率化のための機能のひとつであり、フォロー・フォロワー関係は、伝統的な意味での共同体とイコールではない。また、公共圏はそもそも参加者同士の対等かつ自律的な対話によって成立する。それにもかかわらず、ツイッターで「FF 外」の表現がしばしば使われるのは、「フォロー＝社会的につながりのある共同体に参加する」という前提のもとで、そうした関係性にない相手に自分の意見やコメントを表明する際には、ある種のお作法が必要だと認識されていること、そしてそうした認識は決して特別なものではないことを表している。

ここには、「ウチ」（＝フォロー・フォロワー関係にある人々）と「ソト」（＝それ以外の人々）の明確な対比が見られる。狩猟採集社会の名残から、人間は、自分の所属する「内集団」と、それ以外の「外集団」を区別して扱い、内集団（共同体）のメンバーにできる限りの利益を与えようとするとともに、メンバーが互いに助け合うことも期待している。重要なのは、伝統的に小さな共同体で生きてきた人間にとって、助け合いを志向しないメンバーは排除の対象となりうることである。ツイッターのフォロー・フォロワー関係に共同体を見出してしまうことで、本来はオープンな空間であるはずのツイッターは、途端にご近所づきあいの井戸端会議の様相を呈してくる。アカウントの向こう側には生身の人間がいるはずであり、その人が構築した「ウチ」の共同体に「ソト」から上がり込む際には、せめて土足ではなく靴を脱いでから…という用心深さの表出が、「FF 外」のお作法に込められた真意だろう。

「FF 外」の例に見られるように、私たちが区別する「ウチ」と「ソト」は、必ずしも意味のある基準に従っているわけではない。ある心理学の実験では、大学生の参加者にクレーとカンディンスキーの抽象画を見せ、画家の名前は知らせずに、どちらの絵が好きかを選んでもらった。その後、参加者はクレーの絵が好きな集団と、カンディンスキーの絵が好きな集団のいずれかに割り当てられ、他の参加者とペアを組んでポイント分配ゲームを行った。ただし、分配は匿名で行われ、参加者は、ペアの相手が自分と同じ絵を好む集団（内集団）のメンバーか、別の絵を好む集団（外集団）のメンバーか、ということだけを知らされていた。

現代美術の専門家でもない限り、その場で見せられた抽象画の好みによって区別される集団には、特段の意味は付与されていないと考えるのが自然である。つまり、これらの集

団には、お互いの集団を区別するためのラベルとしての意味しかない。ラベルは、集団を構成する上で最低限必要な要素であり、こうした手続きで人工的に作られる集団は「最小条件集団」とよばれる。

面白いことに、参加者は、外集団よりも内集団のメンバーに対してポイントを多く分配する傾向を示した。参加者にとっての最小条件集団は、実験者によって割り当てられた意味のないラベルにすぎない。それにもかかわらず、参加者はラベルを手がかりに「ウチ」と「ソト」を区別し、自分の集団のメンバーを利するような行動をとったのである。

この実験結果は示唆に富んでいる。伝統的な社会において、集団はルールや慣習、価値観や信念を共有した者同士で構成され、長い時間をかけて親密な関係性を築き上げていくことが一般的であり、異質な他者と出会い、弱いつながりを維持する機会を得ることは容易ではなかった。一方、SNS のように多様な人々が一堂に会する空間では、いとも簡単に自分と異なるタイプの人々を探し出し、カジュアルな関係性を築くことができてしまう。こうした関係性の流動性が高い社会環境では、ほんの些細なものであっても、自他の共通点（ラベル）を発見することで、人々は互いを内集団の一員とみなし、思いやりの精神を発揮することができる。逆に、「FF 外」に象徴される突発的に構築された関係性の中では、自他の共通点よりも異質な点への注目がうながされ、思いやりの精神が弱まるかもしれない。公共圏での対話や議論は、意見の多様性や異質性を前提に置いているが、SNS のようなあまりにもオープンな社会環境では、「ウチ」への突然の来訪者に対する警戒心が高まることは想像に難くない。集団の境界をまたいだ議論を展開することは、それほど簡単なことではないのである。

「ウチ」と「ソト」という考え方は日本文化に特有のものではない。こうした区別は洋の東西を問わず普遍的にみられる。その一方で、「FF 外」のような表現が、欧米諸国の SNS でマナー化しているという話は寡聞にして知らない。日本文化のコミュニケーションのスタイルを欧米のそれと区別するのは、見知らぬ人に対してどのようにふるまうかである。地理的な近接性から人々の往来が盛んなヨーロッパの国々や、移民を積極的に受け入れてきたアメリカやカナダ、オーストラリアといった国々では、そもそも社会環境の多様性が高く、それに対応する形で人々のコミュニケーションのスタイルが培われてきた。見知らぬ人であってもとりあえず受け入れ、まずは話をしようとするのが、こうした文化でのスタンダードなやり方であり、SNS でもそれは同じである。

しかし、こうした傾向にも今後変化が見られるかもしれない。世界の十四カ国を対象に、BBC が二〇一六年に行った調査では、自分を「世界市民」であると考える人々の割合は、ナイジェリアや中国、ペルーで七割を超える一方、アメリカやドイツでは半数を切ることが報告されている（なお、この調査に日本は含まれていない）。自国の伝統やアイデンティティを強調し、限られた範囲の「ウチ」での利益を追求する動きは、これまでグローバル化の経済的恩恵を受けてきた先進諸国の一部で顕著に見られる。これは、近代社会

を特徴づけるオープンな社会環境での経済的な合理性の追求が、人間のこころのはたらきと必ずしも対応していないことの一つの例でもある。

人間自身が作り上げてきた社会はあまりにも複雑で、その全貌を理解するのは一筋縄ではいかない。SNS によって生み出された新たな公共圏も、それを人間が十分に活用できるようになるには、もうしばらく先の話になるかもしれない。とはいえ、一度開かれたドアを再び閉じるのではなく、短期的な揺り戻しを乗り越えて社会環境の変化に適応し、よりよい社会を生み出そうとするモチベーションをもつことこそが、狩猟採集の時代から変わらない人間の本質だろう。